心配ない 俺たちが変える

言葉で探そう あの日の輪郭

宮城県女川町立女川第一中学校

木村（きむら） 峻哉（しゅんや）さん（14） × 佐藤（さとう） 敏郎（としろう）先生（49）

小野智美撮影

2人はバレー部の部員と顧問。木村さん＝写真左＝は津波で母方の祖母を亡くし、仮設住宅で暮らす。2年生で生徒会長。女川一中は津波を免れ、離島・出島の女川第二中学校が一中で再開。二中の保護者たちは町中の仮設住宅にとどまり、新年度に統合して女川中になる。佐藤さん＝同右＝は国語教諭。震災後から全校生徒の俳句作りを指導する。津波で小学6年の次女を亡くした。

木村さん

中学1年の最初の社会科の授業から、みんなで津波対策を考えてきました。昨年11月に町長や町議会の人たちにそれを発表した。

絆をつくる。記録に残す。高台に避難所をつくる。三つの対策を発表後、質問が出た。質問の内容は忘れたんですけど、自分の答えは覚えています。

「これから俺たちが変えていくので、みなさんは心配しないで、温かく見守ってください」

「絶対に期待に応えてやる」という気持ちを込めて答えると、会場に拍手がわきあがった。あの拍手には何が込められていたのか。

三つの対策は全部、実現させたい。例えば、記録に残すため、町の21の浜すべての津波到達点に石碑を建てたい。21基の建立に1千万円はかかる。いま、このための100円募金を始めています。

日本の人口の千分の1の人たちの協力を集められればできる。あながち遠い未来の話ではなく、すごい近い未来の話ではないかな。

高校生になった先輩たちと一緒に活動する場面があるかもしれない。後輩たちもまきこみたい。この活動は、大げさかもしれないけど、死ぬまで続ける。俺の夢は作家なんですけど、津波をテーマに本を書いていこうかな。

あの日、坂の上から、ちょっとだけ波が見えた。音も聞こえたはず。でも音は吹き飛んで、映像だけが残っている。まだ覚えていますね。その中に、ばあちゃんが住んでいた家がちらっと見えた。

ばあちゃんが死んだなんて、今でも信じられない。母さんは元気に振る舞っているけど、かなりショックだったと思います。敏郎先生もいつも元気で、疲れている姿を人に見せない。でも、たまに遠くを見ていることがあるので、あれは、敏郎先生を含めて、誰にでもきっかったんだと思う。

1年の秋に国語の授業で作った句「ごみあげる 無力感が 止まらない」。俺が津波を止めようとしても負けて流されるだけなんだけど、助けることはできなかったのか。その思いは今もあります。

津波があってそれで終わり――ではなく、あとはどうする。

テレビで当時の映像を見るのは嫌です。でも、口にしたくないとは思わない。黙っていては、何も伝えられない。声に出したほうが覚悟ができる。自分がやろうとしていることは、自分のためにも語ったほうがいいと思う。

佐藤先生

峻哉たちは「千年後の命のために」を合言葉に取り組んでいますね。「死ぬまで続ける」のか。すげえなあ。なるほど。

2月15日、全校生徒で防災集会を開きました。テーマは「3・11と向き合う」です。

もうすぐ、あの日が来る。「震災」とか「津波」とか聞いただけで、ドキドキする人もいる。俺もそうだ。でも、その言葉を一生避けて通るわけにもいかない。3月11日は毎年くるんだから――と話しました。集会の後、備蓄食糧の入れ替えの意味でお菓子を食べながら一言メッセージを書いた。

「なになに3・11」というものです。俳句より長くてはだめ。呼びかけでもいい。自分しか分からない言葉でもいい。無理に書かなくてもいいよ。そう伝えました。

3・11を前にメディアが沸く。子どもたちが情報にさらされる前にやらなければ、と考えました。

俺の一言は「3・11私のスタート地点」。あの日から避難所生活が始まり、すべて始まった。スタートには前向きな響きがある。でも、本当の悲しみも、あの日から始まった。そんな話もしました。

「流れ星を二つ見た3・11」と書いた子もいた。あの晩はみんなで体育館に泊まりましたからね。

ふざけて書く子もいた。書かない子もいた。それはそれでいいです。思いは一つじゃない。「れたい」という思いも大事。向合う気持ちは一人ひとり違うを大切にしてほしい。

生徒がつくった俳句を張りています。「あいつはこう思いるんだ」「俺と同じだ」と い、自分の位置確認ができる。

俳句も、一言も、言葉を探すとは、自分と向き合い、自分を探すことです。言葉によってあれが、えたいの知れないものはなく、輪郭が見えてくる。

今年に入り、3年生には2字の作文を書かせています。書で魯迅の「故郷」を読んだ「希望」について。希望を「」にたとえた生徒が多かった。そう書くかもしれないな。

こういう状況でも人間は希望持ってるんだと思いました。厚があると、光は見えない。でも少しでも雲が切れれば、光はすぐに差し込んでくる。太宰「パンドラの匣」の最後にあうに、植物はどんな小さな光見つけて伸びていくんですよ…。それも、猛スピードではなゆっくりと。（聞き手・小野智美）